

美術作品としての絵本

松本 猛 安曇野ちひろ美術館館長

絵本原画の魅力

2003年4月、第13回野間国際絵本原画コンクールでグランプリを受賞したアルゼンチンのクラウドリア・レニャッツィさんが長野県の大自然の中にある安曇野ちひろ美術館にやってきた。世界の魅力的な絵本の原画をコレクションしているちひろ美術館に彼女の作品を加えたいと考えていたばかりは、東京で行われた授賞式の後に安曇野を訪ねてほしいと誘っていたのだ。

ぼくはコンクールの審査員としてレニャッツィさんの『わたしの家』という作品に接した瞬間から、何か、心をとらえて放さない不思議な魅力をそこに感じていた。審査を進めるうちに、作品が日常生活で使われているボール紙や、布や、糸や、木の葉や、パスタなどを張り合わせて作られていることに気がついた。主人公である小さな家が、真っ赤な車や、戦車や、象や、大きな木の上を旅するストーリーにも興味を持った。

美術館に来た彼女は、展示されている世界の絵本原画を熱心に見た後で、自分自身のことや作品について話してくれた。彼女は子どものときから大人になるまで、クーデターがたびたび起こる不安定な政治情

勢の中で育った。服装や髪型までもが軍の取締りの対象だった環境で、彼女は本屋を営んでいた祖父の店に行き、読書をしたり、絵を描いたりしながら空想にふけるのが何よりも楽しかったそうだ。いま、絵本を描いているのは、苦しかった時代に彼女を支えた、「心の自由と想像する楽しさ」の大切さを、子どもたちに伝えたいからだという。

『わたしの家』の魅力の裏側にはレニャッツィさんの子ども時代からの深い思いがあったのだ。その原画はいま、安曇野ちひろ美術館に大切に收藏され、しばしば展示室の壁面を飾っている。

絵本美術館

ちひろ美術館は1977年、いわさきちひろの作品をもとに世界で最初の絵本専門美術館として東京に開館した。97年には世界の絵本原画の常設展示室を持った安曇野ちひろ美術館が開館した。現在のコレクション数は世界27か国、160人の絵本画家による約20,000点におよび、世界の最大規模の絵本美術館である。このコレクションの中には、中国、スリランカ、パプアニューギニア、イラン、トルコ、スーダン、キューバ、ベネズエラ、アルゼンチンなど、



『わたしの家』© Claudia Legnazzi

十分とはいえないまでもアジア、アフリカ、ラテンアメリカ、太平洋地域の作家による作品もある。これらの国々の作家の中には野間コンクールの受賞作家たちの作品も多い。

收藏作品には、たとえばレニャッツィさんの作品のように人生の深い思いが込められているものも少なくない。クロアチアの画家は内戦の苦しみを、中国の画家は文化革命時代のつらさを、また多くの画家たちはそれぞれに戦争体験を背負いながらも、子ども時代の喜びや悲しみを昇華し、心を打つ作品を創っている。優れた絵本画家というのは、自分が本当に描きたいもの



安曇野ちひろ美術館外観

撮影：中川敦玲



『死者の書』(ちひろ美術館蔵)

を誠実に追求し、しかも、その作品を子どもが理解し、楽しめるものを生み出せる人である。

世界中のさまざまな絵本画家たちと出会う中で感じたことは、彼らが子ども時代のことをよく記憶しており、好奇心にあふれ、想像することが大好きで、画壇の地位などには興味も示さない人たちだということだった。すばらしい絵本は、魅力的な人間性を持った描き手でなければなかなか生み出せるものではない。

最近でこそ、日本をはじめ、アメリカ、ドイツなどにも絵本専門美術館ができてきたが、少し前までは、絵本を美術作品と考える人はきわめて少なく、絵本原画は散逸の一途をたどっていた。日本の公立美術館は、近年ようやく絵本の芸術性や文化的重要性に気づきはじめるようになった。しかし、世界的にはまだその重要性を認識している国は少ない。多くの国では、絵本は幼児教育にとって有効な教材であるという認識にとどまり、一歩進んでも、絵本は子どもにとって本の楽しさを知る入り口という、書籍文化、文字文化の範疇でとらえているところが多い。それは、教育関係者や図書館員を中心にした人々が熱心に絵本の普及に取り組んできたことと関係しているだろう。しかし、絵本の価値はそこにとどまるものではない。

絵本の歴史は美術の歴史

現代では、絵本といえば子どもの本という認識が定着している。それは、20世紀に入り、子どもの人権に対する意識が高まり、幼児教育の重要性が語られるようになるなかで、絵本の持つ教育的機能が注目されたことが大きな要因になっている。知識

を教えるためには絵図を示し、それに対応する言葉や意味を示すことが基本である。絵と言葉が一体化した書籍の形態を持っている絵本は幼児教育にとってきわめて有効である。教科書的役割をもった絵本は一気に広がり、子どものための書籍として、あつという間に不動の地位を獲得したのだ。

しかし、絵本のルーツを探ってゆくと絵本の世界が子どものための書籍にとどまることなく、深く大きく広がっていることに気づかされる。

日本で言えば、12世紀ごろから盛んに作られるようになった絵巻物は、日本の誇る代表的な芸術表現である。源氏物語絵巻などの物語絵巻でいえば、観賞していたのは貴族の子女や女房たちであり、信貴山縁起絵巻などの寺社縁起ものであれば、絵解き坊主と呼ばれる語り部が庶民に対して読み聞かせをおこなっていた。これは巻物形態の絵本に他ならない。江戸時代の版本と呼ばれる絵本もまた庶民の大切な娯楽であり、多くの浮世絵師たちが競って絵を描いていた。

中国では4世紀、東晋の時代には絹布の巻物に絵と文字による物語の「画卷」が登場している。インドでは7世紀ごろに宇宙観を表した「曼荼羅」があり、中央アジアから西アジアにかけては12世紀ごろからペルシャ文学の写本挿絵「ミニアチュール」がある。ラテンアメリカの地域では、マヤ文化などの先スペイン期のインディオ文化に歴史や宗教観を表す巻物形態の「コディセ(絵文書)」があった。こうした絵本の前身の中で、もっとも古いものは、紀元前16世紀にまでさかぼることができる古代エジプトのパピルスに描かれた「死者の書」である。これは死後の世界への案内書であった。

「死者の書」は壁画としても描かれてい

る。持ち運びができる書籍という概念を離れて、物語を絵に表すものまでを絵本の仲間、物語絵(イラストレーション)と考えるなら、実はきわめて多くの美術が物語絵に他ならない。仏教美術も、キリスト教美術もその背後には物語が潜んでいる。教会で見るキリストの絵があれば、多くの信者たちはその向こうにあるキリストの苦難の人生を感じている。神話を題材にした美術も、さまざまな歴史画も、19世紀ころまでの大半の美術の向こうには物語がある。

絵本は想像力の源泉

たとえば、「鶴女房」型の昔話を題材にした絵本を見る日本人は、その背景に雪国に暮らす農民の生活を思い浮かべるだろう。深い雪に覆われた冬に、家の中で機を織る生活は現代の農村の生活にはない。鶴の生息地も狭まり、なかなか目にすることはできない。しかし、凜と張り詰めた冬の空気は今もあり、澄み渡った空に鶴が飛んでゆくことを想像することは難しいことではない。それを手がかりに、昔の日本の農村へ、時空を超えてイメージを膨らませてゆくことができれば、物語の楽しさを何倍にも膨らませて自分のものにできる。

想像力を使った絵本の楽しみ方は、もちろん海外の物語絵本にも応用できる。アンデルセンの「マッチ売りの少女」の場合であれば、北欧の冷たい石畳の町の姿であり、「白雪姫」の場合なら深い森と、7人の小人への空想の旅である。そのイメージを心の中に豊かに繰り広げられるかどうかの鍵を握るのが、北欧の町並みの絵であり、小人の生き生きとした動きを感じさせる絵なのである。

これは誰もが知っている物語絵本の例だが、現代作家が創作した絵本であれば、絵



赤羽末吉『つるにようぼう』より（ちひろ美術館蔵）

のもつ役割はさらに大きくなる。単にリアルな絵であればいいというのではない。画家のイメージが豊かであり、絵の向こう側にある物語をしっかりと伝えられる力を持つ絵が、優れた絵本には必要になる。ハッとするような色彩の輝きも大切なのがあるだろうし、思わず何だろうと引き込ませる大胆な造形が意味を持つこともある。

美術が人類の歴史のなかでこれだけ豊かに発展してきた理由は、絵を観ることで無数の物語を想像する楽しみと、その心地よさを人間が感じることができたからに違いない。絵本は子どもたちに、もちろん大人にも、その喜びが体験できる、もっとも親しみやすい表現形態なのである。

世界の絵本の楽しみ

ぼくは、これまで幸運にもたびたび世界中の絵本原画が集まってくるコンクールの審査にかかわることができた。スロバキアの首都で開催されるブラチスラバ世界絵本原画展（BIB）、スペインのバルセロナで開催されたカタロニア賞、イランのテヘランで開催されたアジア絵本原画展、野間国際絵本原画コンクールなど、それぞれに印象は深い。審査をしていて、最も楽しいことは、個性や民族的伝統や新しい表現の潮

流などが織りなす多様な表現に出会えることだ。

現代はアルタミラやラスコーの洞窟壁画からアメリカの最新のコンテンポラリーアートまで、あるいは世界のどこの地域の美術でもほとんど自由に目にするができる。昨年、BIBでグランプリを受賞した出久根育さんのグリム童話を題材にした作品は、ドイツやポーランドやスロバキアの審査員が驚くほど、伝統的なヨーロッパを感じさせる作風だった。たしかに現代の作家たちは伝統からも地域性からも自由に羽ばたける。その一方で、確実に自分の生まれ育った国の文化的伝統を強く意識した作風にこだわる画家も増えているように感じ

る。ナショナルであることを追求することによってこそインターナショナルな意味をもつことも少なくない。

今回の野間コンクールで次席を受賞した韓国のパク・チョル・ミンさんの作品は物語との調和も意識したのだろうが、伝統的な画法を用いている。しかし、同時にアニメーションをも思わせる構成や、大胆な構図、微妙な色彩のなかに斬新な表現を見ることができた。

世界中どこにでも見られるディズニーや日本のアニメ文化を単純に否定するものではないが、それぞれの国の文化を大切に、若い世代に伝えていくことは、やはり絵本の重要な役割の一つだと思う。



野間コンクール国際審査会にて

まつもと たけし

1951年東京に生まれる。東京芸術大学美術学部芸術学科を卒業。現在、安曇野ちひろ美術館館長。長野県信濃美術館館長。絵本学会理事。エリック・カール絵本美術館（アメリカ）名誉理事。安曇野アートライン推進協議会副会長。1977年ちひろ美術館、1997年安曇野ちひろ美術館を設立。BIB（ブラチスラバ世界絵本原画展）カタロニア賞絵本原画展、アジア国際絵本展、絵本にっぽん賞、日本絵本賞、野間国際絵本原画コンクールの審査員を歴任。世界中の優れた子ども本のイラストレーター - の作品収集に力を注ぐ。著書『母ちひろのぬくもり』（講談社）『ぼくが安曇野ちひろ美術館をつくったわけ』（講談社）『ちひろ美術館の絵本画家たち』（新日本出版社）など多数。長野県在住。